

## 企業活動の根底には新潟水俣病の経験があります

記録：杉村更紗

編集校正：高田研、白神加奈子

聞き取り場所：阿賀町文化福祉会

日付：2018年8月30日

### 昭和電工（株）担当者

#### 【藤上 隆さん】

昭和電工 総務・人事部 総務グループリーダー

大分県出身。昭和電工に入社後、埼玉県秩父市、福島県喜多方市、千葉市原市、長野県大町市、大分県大分市、再度、長野県大町市で勤務し、現在に至る。

#### 【松本喜彦さん】

昭和電工 石油化学事業部マネージャー兼総務・人事部総務グループ マネージャー

神奈川県出身。横浜市にある工場勤務後、東京都港区にある本社へ。今年(2018年)の1月から、水俣病に関する業務は藤上さんが主担当となったが、その前は約18年間水俣病に関する仕事に携わっていた。



### 昭和電工と新潟水俣病

前回2010(平成22)年に、「あおぞら財団」さんは、「公害地域の今を考えるスタディツアー 2010 新潟水俣病の地を訪ねて」ということでこの新潟の地でツアーを実施されました。8年経ちましたが、その間の主だった出来事を挙げますと、2010(平成22)年に、いわゆる「新潟水俣病救済特別措置法」の救済措置が閣議決定され、翌年の2011(平成23)年3月には、第4次訴訟が和解をしまして、2013(平成25)年12月には第5次訴訟が新たに提起されました。また、2015(平成27)年には、新潟水俣病が公式確認されて50年という節目を迎えるなど色々なことがありました。

2015(平成27)年の公式確認50年にあたっては、その準備として前年2014(平成26)年から、当社も参加させて頂いて、数回に亘って立場の異なる方が集まって様々な議論を重ねてきました。その結果、様々な評価はあろうかと思いますが、2015(平成27)年の50年事業は成功裏に終えたのではないかと考えております。

当社のご承知のとおり、新潟水俣病の原因企業です。新潟水俣病公式確認から53年が経過して深い反省の元に、二度とこういったことを起こしてはいけないと改めて肝に銘じているところです。引き続き、「あがのがわ環境学舎」さんや新潟県をはじめとする関係各位のご指導を仰ぎながら「歴史と教訓」を伝えていく取り組みを進めて参りたいと考えております。本日はこのような対話、ヒアリングの機会を頂きまして本当にありがとうございます。その中で、皆さまの忌憚のないご意見等を頂ければありがたいと思います。

### 昭和電工という会社

ヒアリングの前に昭和電工グループの概要と昭和電工グループのCSR活動、RC(レスポンシブル・ケア)活動についてご説明をさせていただきます。

### 根底にある新潟水俣病

昭和電工グループのCSR活動、RC活動の根幹をなすもの、底流にあるものとして、新潟水俣病を引き起こしてしまった原因企業としての深い反省と二度とこのようなことを起こしてはならないとの強い決意があるということを申し添えたいと思います。つまり、これらの活動は、新潟水俣病の反省を元にして、出来上がっているということです。

具体的には、お手元の「昭和電工レポート2018」でご説明させていただきます。これは、ダイジェスト版です。フルレポート版もありますが、時間の関係もありダイジェスト版でご説明をさせていただきます。

### RC（レスポンスブル・ケア）活動は中心的な役割

ダイジェスト版をご覧ください。最初に「グループ企業理念」が書かれています。続いて、「数字で見る SHOWA DENKO」ということで昭和電工グループのオンリーワン、ナンバーワンにどんなものがあるか、誕生 79 年、事業分野が 6 つ、従業員が 10,000 人強、売り上げがどのくらいか、などの記述があります。

続いて、「社会とつながる SHOWA DENKO」ということで、私どもの製品がどのようなところで使われているか、記載されています。昭和電工グループは素材メーカーですので、一般消費者の目に触れるものはあまりないのですが、私どものような素材メーカーがないと、皆さんが直接目に触れるモノを作っている企業も困ってしまうわけです。つまり、縁の下の力持ちのような会社です。続いて、社長の森川宏平の「トップメッセージ」や「昭和電工グループのビジネスモデル」、「事業紹介」などを紹介しています。

そして、本日の主要の論点である「CSR マネジメント」についての記載があります。昭和電工グループは「社会貢献企業」の実現に取り組むことによって「CSR（企業の社会的責任）」を果たそうとしております。CSR 活動の中でも RC（レスポンスブル・ケア）活動は、中心的な役割を果たしています。あまり聞き慣れない言葉だと思いますが、RC 活動は、化学物質を研究し、開発し、製造し、それをお客さんに利用してもらって、廃棄してリサイクルする、という全ての過程で、「健康、安全、環境」を確保するという取り組みです。これは昭和電工グループだけがやっているのではなく、世界中の化学メーカーが基本的には取り組んでいます。繰り返しになりますが、当社が行なっている RC 活動は、新潟水俣病の反省に立った上で仕組みが出来ているとご理解いただきたいと思います。

### 雇用が一番の地域貢献

お手元の「新潟昭和」のパンフレットをご覧ください。「新潟昭和」は新潟水俣病の基点となった場所です。まさに、そこから新潟水俣病が広がっていきました。これは厳然たる事実であります。ただ、そのことに加えて別な視点からもみると、鹿瀬の地に対する「地域貢献」という視点もあろうかと思えます。もちろん新潟水俣病を起こしてしまった事実は大変重く受け止めなければなりません。一方で、そういった別な視点があることもご理解いただければ、と思っています。

当時、鹿瀬工場には、3,000 人もの雇用がありました。今からすると、考えられないことですが、その後、時代の変遷もあり、今では 100 名程度の工場となっています。皆さんから見ると、少ないと思われるかもしれませんが、この地区で 100 名程度というのはそれなりの規模の雇用ということになります。そういう面では雇用というのが一番の地域貢献かと思っていますので、できるだけ、昭和電工は新潟昭和と連携しながら、難しい点も多々ありますが、働く人が少しでも増えていくよう引き続き考えていきたいと思えます。

先ほど、新潟昭和をご覧になっていただき、過去から現在に至るまでの姿を見ていただきました。皆さんがどういった感想を持たれたのか担当者としては大変、気になるところですので、後ほど、お話をお聞かせ願えればありがたいと思えます。

### 新潟水俣病の責任

視点を変えまして、新潟水俣病の責任ということについて触れさせていただきます。当社に、新潟水俣病を発生させた責任があるということは、非常に重たい厳然たる事実であります。被害者やそのご家族、周辺流域の方々などに多大なご迷惑お掛けしたことを深く反省しております。このことは我々担当者に限らず、昭和電工全体としても、ひとときも忘れてはならないことだと思っています。

原因企業として、補償に関する事項について、法令や制度に則って誠実に確実に補償を履行することは当然のことです。これまでもそうでしたし、これからも、将来にわたって変わることはありません。

現在、新潟昭和という子会社は別にしまして、新潟県内には昭和電工本体としての工場はないのですが、新潟市に隣接する五泉市に事務所を置いて、そこに補償実務を専任で行う担当者を 3 名配置しております。患者さんや行政、医療機関などの窓口として、各所と連携を取りながら補償業務を進めております。

過去を振り返って見ますと、いろいろな評価や見方があると思えますが、昭和電工は原因企業として、誠実に真摯にできる限りの取り組みをしてきたのではないかと考えています。

例をあげますと、

※第1次訴訟の際には、「1審判決で不利な判決が出たとしても控訴はしない。」ということを決断、宣言し、判決を受け入れました。また、判決後2年弱という短期間で被害者と昭和電工の双方が納得できるような形をつくることができました。

※第2次訴訟では、地域の再生や振興などの趣旨に賛同するというので、新潟県に対して3億円余りの寄付を行いました。その寄付が「環境と人間のふれあい館」の建設資金の一部や新潟水俣病の書籍出版の資金に充てられることになり、県の啓発活動事業の一助となりました。

※さらに、2011（平成23）年の第4次訴訟の和解以降は、医療手帳や水俣病被害者手帳をお持ちの、いわゆる未認定患者さんが高齢となって公的介護保険サービスを受けた場合、訴訟原告以外の方も含めすべての手帳所持者の介護サービス費のご本人負担分の一部を補助しています。

などが挙げられるかと思えます。

昨今、被害地域の再生が今までに増して求められている中、未来に向けて水俣病の「歴史と教訓」を伝えていくために、当社としてもどうことができるのかよく考えながら、「あがのがわ環境学舎」さんなどと共に、取り組みを進めてまいりたいと考えています。

\*以降、学生からの質問（見出し）に答える形で

### 鹿瀬で主力であったアセトアルデヒドの生産を止めた決定的な理由は

(昭和電工)

アセトアルデヒドの事業が、鹿瀬の地では立ち行かなくなってきたからです。その後、アセトアルデヒドの事業は山口県の工場に移しました。基本的に、社会情勢の変化などもあり事業として存続ができなくなったということが止めた理由です。

(あがのがわ環境学舎)

補足しますと、日本ではアセトアルデヒドはカーバイドから作るのが従来の方法でした。しかし石油からつくるという方法もあり、世界の主流は石油でした。

昭和30年代は石油から作る方法に転換する時期でした。それで昭和電工も、石油から作る方法ということで、山口県の工場を稼働する準備をされていて、それが稼働し始めたのが1964(昭和39)年12月<sup>40</sup>でした。そういうことで、翌年の1965(昭和40)年の1月に、鹿瀬の地では逆にもうアセトアルデヒドを作る必要なくなったので、生産を停止したというわけです。

### もし景気が悪くなり、会社が赤字になっても同じことを繰り返さない自信は？

(昭和電工)

会社の収益が黒字だろうが赤字だろうが、前提となるのは、先ほどから申し上げているとおり「安全」であり、「環境」であり、「健康」なのです。そういったものをないがしろにして、事業を進めていくことはあり得ません。当社に限らないと思いますが、企業が社会と共存し、また社会に貢献していくためには、こういったことが大前提であると考えています。



### 公害を今後繰り返さないために、啓発活動として取り組んでいくことは何か。

具体的には、公害を、今後繰り返さないためには予防の観点

40 1962(昭和37)年アセトアルデヒド生産のため昭和電工、日本瓦斯科学鉱業(現三菱ガス化学)三楽オーシャン(現メルシャン)の3社が出資して徳山石油化学(株)を設立する。1999(平成11)年に昭和電工と合併。(昭和電工徳山事業所パンフレットより)

に立つことが大事だと感じている。そのアプローチは、啓発の活動と、科学技術をより充実させていく2つがあると考えている。啓発の活動については被害者の方が語り部となって活動することが多いが、昭和電工が啓発活動として取り組んでいることは何か。

(昭和電工)

当社の啓発活動は、基本的には、「あがのがわ環境学舎」さんが様々な研修プログラムのノウハウをお持ちしていることから、同学舎さんと連携させていただきながら、取り組ませていただいております。そのプログラムの中で、新潟昭和の見学者には、新潟昭和の過去から現在に至るまでのありのままの姿をご覧いただき、加えて排水管理についての状況や現地視察をしていただくなど、歴史と教訓をしっかり伝承していく取り組みを行っております。

数年前までは、新潟昭和への工場見学は受け入れておりませんでした。こういった地道なことを可能な範囲で続けていき、地域の方々をはじめ、関係する方々に昭和電工グループのことを少しでもご理解いただけるよう、努力してまいります。

もう一つの科学技術によって公害を起こさないようにする、というご指摘ですが、これは化学会社として非常に重要な視点だと思います。景気の波や会社の経営状況にかかわらず、そういったことを続けていくということは、大変重要なことだと思っておりますし、実際に昭和電工グループもそういったことを意識した事業運営を行っております。

皆様も使用済みのプラスチックの問題や海洋プラスチックゴミの問題をご存知かと思えます。本件は、昨今、大きく取り上げられていますが、今後さらに大きな問題になっていくと思われます。この件に関連して、当社は、家庭などから出たプラスチックのゴミを集めて、それをアンモニアや水素といった工業製品の原料として有効利用するといった事業を行っております。

また、非常に地道ではありますが、先ほど新潟昭和の見学時に話題となったアルミニウム缶のリサイクル活動を全社挙げて推進しております。

アルミニウムはボーキサイトという鉱石から作るのですが、その過程では大量の電気が必要となります。そのボーキサイトからアルミニウムにするよりも、アルミニウム缶を回収してそれを再生すると電力が97%も節約されることとなります。このようなことも行っているのです。

地道な活動かもしれませんが、以上のような環境に配慮した取り組みというのは大変重要になってくると思っております。ですから、過去、私ども化学メーカーが原因となって引き起こした公害は大きな負の遺産ではありますが、一方で、そうした問題を解決していく糸口を持っているのもやはり私ども化学メーカーではないかと思っております。

### 昭和電工レポートに「新漏水俣病」という言葉がでていないのでは

昭和電工のCSRは新漏水俣病を基点にして組み立てられているとあったがレポートの中には「新漏水俣病」という言葉がないのではないかと。地道な活動を継続されていることや、ステークホルダーとの関係性など、地道におこなっている具体的なことをもっと記載してもいいのではないかと。

(昭和電工)

ご指摘、ありがとうございます。先ほど触れさせていただきましたが、「昭和電工レポート2018」のフルレポート版で、新漏水俣病のことに触れています。54ページのレスポンシブル・ケアの中の環境保全という項目があり、そこに「新漏水俣病に関しては公式確認から50数年経過しました。…」との記載があります。



「記載量が少ないのでは？」と思われた方もいらっしゃるかもしれませんが、この「昭和電工レポート2018」というのは、昭和電工に関することについて、できるだけ様々なことを掲載しようとしているレポートなのですが、紙面の都合もあり残念ながら載っていない項目もたくさんあるわけです。そういう中で、ここにわざわざ囲みをつけて新漏水俣病のことに触れているわけです。意図的に新漏水俣病のことを掲載しているのです。このようにご理解いただければありがたいと思います。

(あおぞら財団)

8年前には載っていなかったと思います。そう思うとこの8年という変化は大きいのかなと思います。

### 昭和電工と社員の関係性

昭和電工は企業城下町という言葉が誇りに思えるくらい文化的な繁栄などを達成され、社員との関係も家族といった感じで、利益を共有されていたと思うが、事業規模を拡大する中で社員との関係で変わったことや、気をつけていることなど教えていただければ。

(昭和電工)

基本的に、当社は人に優しい会社ではないかなと思っております。当社の社風は、外部のかたから見ると、「おっとりして、真面目な社員が多く、何事にもコツコツと取り組む」という評が多いのではないかと考えています。

社長の森川宏平は、昨年2017年1月に社長就任しましたが、就任時から、「全てのステークホルダー（企業の利害関係者）にご満足いただく」ということを言い続けています。ステークホルダーにはいろいろあり、お客様、株主様、投資家、地域の方々、従業員など、様々な方がいらっしゃいます。どの利害関係者も非常に重要な存在ですが、社長の森川は、その中でも従業員を重視しております。平素から従業員との対話などには特に意を用いており、「昭和電工レポート2018」をご覧くださいいただければ、森川の姿勢や意図を汲み取っていただけるのではないかと思います。